
知られざる世界の旅人

たつたまごっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知られざる世界の旅人

【Nコード】

N8398X

【作者名】

たつたまごっち

【あらすじ】

え？テンプレ？転生ですか・・・やっぱり一つの世界じゃ満足できねえ！少しマイナーなチート？（道具）を貰いさまざまな世界を旅する物語です。

旅の始まり（前書き）

自称ドクター（偽）が世界をめぐる旅です。処女作、最強要素、原作破壊、ご都合主義がダメな方はお引き返しねがいます。更新は不定期です。

旅の始まり

さあ、みなさん死ぬとはどんな感じなんだろうか？

僕はついさっき体験したからわかるけれど生きているみなさんはどう考えているんだろうかな？

まあ、世間では走馬灯が見えるとか三途の川を渡るとか言われているけれど、

そんなことはない！断じてだ！

俺は死んだ……

まあ、テンプレのように子供を助けたとかじゃないけど

なんか某隙間妖怪さんのようなスキマに吸い込まれたわけだが

死んだ感覚というか自分が消えていく感覚があつたから死んだと思うんだけど

「じゃあ俺は今どこにいるんだ？」

今俺がいるのは真っ白くて何も無い空間、奥行きも高さもないただ白だけの空間だ！

「ここはボイドとか虚数空間とか外の世界では呼ばれていますね」

また髪の毛が鮮やかな青色なよう！、よだった。

「え？」

俺はフリーズした……

「おゝいゝすゝいゝまゝせゝん」

「……………」

「返事してくれませんか？」

10分後…………

「おゝい（泣）」

「うわ！？どうしたの？」

「いったいなんだっていうんだ？」

「私の話を聞いてくれますか？」

涙目で訴えてくるので…………

「だが断る」

「何ですか（泣）」

そろそろ本気で泣いてしまいそうだから話を聞いてやろう。

「はゝおふざけはここまでにして話って？」

「はい！単刀直入に言います。あなたは消えました。」

「え？死んだとかじゃないの？」

こついうのって間違えて死にましたとかじゃ？

「死んだといつても過言ではありませんが本質的には時空間の裂け目に落ちました。」

「時空間の裂け目？」

そんなドクター・誰的なものがあるのか？

「そうですね。世界の歪みみたいなですよ。

前にこの世界で起きたのは大体6550万年ぐらい前だったはずですね。」

6550万年前って恐竜の絶滅したときじゃねえか、そんなのが起きて地上は大丈夫なのか？

「今回の規模も小さかったので被害は最小限！つまりはあなた一人だけです。」

俺一人だけか・・・って俺の心読まれてね？

「ええまあ、一応世界の管理者やってますから（キリッ）」

「ようゝで言われてもね」

「わたしだって好きでこんな体してません！！といえますかそんなことうでもいいんですよ！これからのことを決めましょう」

これから？俺は消えたんならこのまま存在も意思もすべてが消えるんじゃない？

「そんなことすればすべての世界が消滅しますよ？」

え？何それ怖い……

「すべての世界での命の総数は決まっています。一つでも減れば莫大なエネルギーが生まれすべての世界が消滅するということですよ。」
「そーなのか！」

「ここからはよくあるテンプレと同じく少しですが願いを叶えましょう。そうですね、数は4つですかね？一つにつきオプションもつけましょう。こんなところですかね？」

「基本的に何を頼んでもいいの？」

何でもは無理でしょ？だってよくチートオリ主が使うような世界を破壊する力とか創造とかやばくね？

「そうですね？神にしてくれとか命の創造とかは無理ですね。」
「じゃあ基本的のなんでもいけるのか……」

「じゃあ一つ目にめだかボックスの日之影空洞の「知られざる英雄」
《ミスターアンウン》とそれに見合うだけの戦闘能力を」
ぶっちゃけめだかの完成とかよりかつこよくない？

「見合うだけの戦闘能力はその異常の付属アブノーマルなので願いの消費は1つですね。」

じゃあ次は子供の時からの夢を叶えよう。

「ドクター・フリーに出てくる次元超越時空移動装置を世界を渡る能力を付けてそして俺でも弄れる様に簡略化しておいてくれね？」
子供のころからこれに乗りたかったんだよね！

「えーと、簡略化はいいんですが世界を渡る能力は例えば物語の世界に行っただとしてもそれはパラレルワールドにしかありません。本当の物語の世界は封印されており誰も外から干渉できません。まあ、パラレルワールドと言っても99.9999%同じですけどそしてむやみやたらと歴史をかいへんしないでくださいね。下手をして世界が壊れては困りますから」
すっげー！ほとんど叶っちゃった。後二つはと……

「3つめは十二の試練トライエン・ハンをお願いしたい。」
fateで一番好きなサーヴァントの宝具だしね。

「え？ターデイスとくれば種族をタイムロードにしてくれとかじゃないんですか？」
あんたタイムロード知ってたんだね。

「そりゃーねー本物と友達ですしね。」
え？

「まあ、そんなことはどうでもいいんです。じゃあなんで十二の試練トライエン・ハンなんですか？」

「タイムロードだと再生するたびに顔や体が変わるだろ？それが世界を移動している間になればまた前の世界に戻った時に不便だからね似たようなのを思い出したらこんなのがあったからね。これを選んだんだ。」

「では、十二の試練^{ゴット・ハンド}を付けておきます。これもタイムロードっぽく再生から15時間以内は細胞活性化時間として腕ぐらいなら再生するようにはしておきますね。」

「やっぱりこの管理者はオプシオン抜群だな!!」

「最後は知識をお願いします。具体的にはすべての世界の知識をターデイスに詰めておいてくれないか?そしてその該当する世界に行ったときにその世界の知識が頭に流れ込むようにしておいてくれないか?」

これで世界で迷うこともないだろう。

ゴマダレ

ゼルダのような効果音が鳴る響く……このなにもない空間にこの音が響くのは非常にシニールだな。

「はい!ターデイスに付加完了しましたよ。え〜とターデイスの形はどうしますか?カメレオン回路は壊れていませんから行った先で形を変えますか?それとも今ここで固定しておきますか?」

「う〜んどうしようかな?でもやっぱり!」

「あのポリスボックスをお願いします。」

ターデイス(改)とはいえやっぱりターデイスはあの形じゃないかね(キリッ)

何もない空間が光り始める。そしてあのターデイス独特のエンジン音が鳴り響き……何もない空間にあのポリスボックスが現れた。

「これで要求はすべて満たされましたがあとなにかありますか?」

幼女が「幼女言うな！！！」

管理者がそう言う

「一つだけ聞かせてくれるか？」

俺は最後に一つだけ聞きたいことがあった。

「なんででしょうか？」

「君はずっとここで一人つきりなのか？」

「ええ、そうですが？」

管理者が淡々と言う。

「何も思わないのか？」

「初めのころは寂しかったですけど今はもう慣れました。」

慣れたと言いつつも寂しげに俺の微笑む

「じゃあ最後のオプションの追加だ。ここにもターデイスで来られるようにしてくれるか？」

「！？ なぜそんなことを？」

本当になぜかわからなさそうに俺に聞く

「君が寂しそうだったからな・・・」

せつかく可愛いんだ大人になるまで待っていれば美人になりそうだからな

「君には笑っていてほしいんだ。」

くせえ・・・臭すぎる・・・誰かフアブリュズを

「え・・・は、はい／＼」

顔を赤らめながら言う。

あんなセーフこんな冴えない俺になんかに言われたんだ。羞恥心抜群だろう。

「あ・・・これでターデイスは要求道理ですよ？では、最後に容姿などの設定に行きましょうか」

容姿か？何がいいかな・・・

「容姿は上の下ぐらいので頼むもちろん性別は男で年は24歳ぐらいからにしておいてくれ。」

「了解しました」

せつせと幼女が作業している間俺はこの世界に行くかを考えていた・・・

「作業完了しましたよ！ではいつてらっしゃいませ楽しい世界の旅を！いつでも戻ってきてくださいね」

笑顔で見送ってくれる。

「あ、最後に私の名前はアテネです。おぼえておいてくださいね。」
そんな有名な人だったんだ・・・ま、関係ないけどね・・・

「また来るからまたね」

といいターデイスの中に入る・・・

中は第9代目ドクターの時のターデイスとほとんど同じ少し違うのはモニターだけですべて操作できることだけだ。

ドクターのように操ることはできないしな、あのボタンの中には自爆スイッチもあるみたいだしね

そしてターデイスは何もない空間から独特のエンジン音を鳴らしこの空間から消えていく……………

アテネ side

「あんな奴君以外は初めてよドクター？」

アテネが尋ねる人物こそかの有名なドクター本人である。

彼の世界に管理者はいないそのため代わりに管理者代行として時空を回っているのだ。

「ああ、そうかもな。実にファンタスティックだ！」

ドクターがふざけたように言う。

「まあ、ファンタスティックかはおいておいても彼は世界のためになるわ」

「後は彼次第かな」

「ええ、もう行くの？」

「ああ、もう行かないと……………ではまた」

「また会いましょう」

こちらもさつきと同じようで違うエンジン音を鳴らしながらターデ
イスは消えていく……………

「後は精々楽しませてもらいましょー!」

そう言いアテネはこの空間から消える。

誰もいなくなった空間

そして物語はこの空間から始まる……………

旅の始まり（後書き）

こんなもんですが今後も見ていただけると嬉しいです。
ただターデイスを使って世界を回るのが見たかっただけです（笑）

ターデイスの中そして初めての世界

俺はアテネと別れた後このアテネにもらった魔改造ターデイスの中を探索することにした。

そして今………

「すっげー!!!!!!」

こんな叫び声をあげることになったのは思い出すこと2時間前のことである。

二時間前………

「まずは、この手紙を読むことにしようかな？」
ターデイスに入ってすぐのところ到手紙があり裏に「アテネより？」とか書いてあったので破りたくなつたがその衝動を抑えつつ手紙を読むことにした………

—《こんにちは？アテネです。あなたは今どこで何をしていますか？と「you」ネタをしてから話を進めますね。ではまずこのターデイスですがドクターフー本編で言っていたように普通の乗り物ではなく生きていますので機嫌を損ねないようにね。それに艦魂のようなものから見つけたら話しかけてあげてね、そしてこのターデイスは地下10階までありますよ？疑問形なのは自分でもわからないからね……多分地図はメインモニターに映し出されるはずだからそれで調べてね！そして最後に2つ、一つ目はこのターデイスは本当のドクターフーの世界には行くことができません。理由

はドクターが世界を隔離しているからです。そして2つ目は自分の名前を決めてね。

君は文字道理世界から消えたから名前、痕跡、記憶、すべてが消えているので君の名前は使えません。

では、

楽しい世界の旅をー アテネより》

そーか、だから俺の名前である「×× ×××」は発音も書くこともできないんだな。……

やっぱりずっと使ってた名前だからな惜しみたくなるけど……そうだなー新しい名前は……「ドクター」

やっぱりこれだろう。よし、名前も決まったことだしターデイスの探索をしようかな。

メインモニターをいじり地図を表示させる。

ターデイス内部

一階

メインルーム

二階

居住スペース

三階

食糧貯蔵スペース

四階

武器貯蔵スペース

五階

ダンスルーム

六階

図書館

七階

ゲストルーム

八階

病棟

九階

訓練スペース

十階

?????????

広すぎねー（呆）

無駄に頑張りすぎだよアテネエ・・・

1階だけで広さ的には豪邸レベルなんだぞ・・・

まずは、武器を見に行こう！

四階 武器貯蔵スペース

「すっげー！！！！！！！！！！」

つい年を忘れて叫んでしまった。

しかしその筈全世界の武器・道具が所狭しと並べられているのだからな

「これは、一〇式戦車じゃないか！！！！」

10式戦車だけではない世界中の戦車がある。

「ワルサーP-38！！！！！！！！！！」

「素粒子ガンまで・・・・・・・・・・」

「こ、これは、ディエンドライ（ry」

自重しろwww

「武器だけでもうお腹いっぱいだな」

そうして見つけた……これを「ソニックスクリュードライバー」だ！

俺もやっぱりこれを持って旅をしよう！

そろそろ初めの目的地を見つけようかな……
いつまでも宇宙空間に漂っている訳には行かないしね……

「では、初めは「東方p」「ガタツン」！？なんで勝手に止まった？……」

まあ、旅は長いんだ東方の世界はまた今度にしよう！

「ターデイスよ、この世界の知識を頼む。……
大体分かった」

「この世界は『涼宮ハルヒの世界』だ。」
やっぱり俺が異世界人のポジションなのかな？
ってこの世界にいたと思ったらなぜターデイスの中に長門とキョ
ンが？

あ、そうかこの座標……

「情報結合の解除を申請す……る？」

かの有名なヒューマノイドインターフェイス長門有希と朝倉の戦い
の真っ最中の封鎖中空間に入っちゃったみたいだな……

どうしよう？

キョンスイデ

俺は朝倉に放課後呼び出され殺されかけた・・・マジで死ぬ5秒前だと思っていたとき長門が助けに来た。

長門と朝倉の宇宙的戦闘を真近で見そして長門が鉄の棒に刺されたと思った瞬間・・・

独特のエンジン音が鳴り響き鉄の棒の前に昔何かで見たことがある特徴的なボリスボックスが俺と長門を巻き込み現れた。

今度はなんなんだよ・・・もう勘弁してくれ、やれやれ

サイドアウト

ターデイスの中そして初めての世界（後書き）

二話目です少し強引ですが勘弁してくださいね
感想お待ちしております！

初の戦闘

おいおい世界についたと思ったたらすぐに戦闘開始ってか？
まあ、いいまずこいつらに話を

「おい、誰もいないのか？」
キヨンが言う。

おいおい俺がいるじゃねえかってそうか「知られざる英雄」《ミス
ターアンノウン》のせいで存在感がない、いやありすぎて無意識的
に目をそらしているのか？おっと、長門は気が付いたようだな！そ
の証拠に長門はその透き通るような目をこちらに固定しているしな

「うお！なんだお前？」
声を張り上げるな……

「そっちこそなんだ俺の船に勝手に入りやがって」
こっちはなにも知らないふりをしておかないと、そうしないと怪
しまれてしまうからな……

「すまんが何が起こったか俺には分からん！宇宙で「あなたは少し
黙っていて」

長門がキヨンの話すのを遮る。

「ここは何？あの空間は朝倉涼子が封鎖していたはず何も入れない。
どうやって入ったの？」

「質問をする前に君たちは何なんだ？まず、名前を覚えてもらいた

い」

「長門有希」「××× ××だ。」

「え？なんだって？そちらの男の方が聞き取れなかった。もう一度頼む」

なぜ聞き取れないんだ？キヨンの方だけだ
日本語をしゃべっているのか？50億の言語を自動翻訳するターデイスですら翻訳は無理だというのか！

「××× ××だ。」

もう無理……人間諦めが肝心だな！

「あだ名を教えてくれ」

「な、なんで？」

「彼ではあなたの名前を聞き取ることは不可能、強力な情報防壁がある。私でも解くのに1億年以上かかる。」

長門が驚愕の事実を言う。もしかしたらキヨンの名前がこの世界の根底にかかわっているハルヒに何らかの影響を及ぼすのかもな

「はあ、自分の名前も言えないとは……キヨンだ。みんなからはそう呼ばれている。」
だるそうにキヨンが言う。

「俺の名はドクター」

「ドクター何？」

あつ、あつぱりそうなるか

「只のドクター誰でも無くなんでもないドクターだ。」

「いいや、ドクターとやらお前はいつたいなんなんだ？」

「俺はこの世界ん定義で言うなら異世界人で超能力者だ。」
「^{アブノーマル}厳密には異常だけどこの世界じゃ変わりもないだろ。」

「で？何をしにこの世界に？>ガ、ガッタン<！？」
「この衝撃は？」

「外にいる朝倉涼子の攻撃、ここも危ない」

「ここが只の閉鎖されているだけの空間だったらな。ここはターデイス僕のターデイスだ。世界、そして時空間を旅するんだ。情報操作ごときではやられないよ」

「なあ、長門どうする？」

「一旦体制を立て直してからもう一度戦う」

「やっぱり、おまえらは卑屈だね？まずこついうのは、話し合ってみるんだよ！」

「といい俺は勢いよくターデイスのドアを開ける。」

「おい、ま、ま」

最後まで言い終わるまでにはもうドアを開けていた。

「あら、あなたがこのヘンテコな青い箱をこの空間に運んだ張本人ね？別にどうでもいいわ、あなたごと消してあげるわ。」

と朝倉は鉄の棒を某英雄王の王の財宝の^{ゲートオブヒロイン}ように打ち出すが

キン！カキン！バキ！

といったように俺の前の透明な壁に遮られ俺には1つも傷をつけれない。

「それだけか？無駄だね。ポイントゼロ、フォースフィールドがすべて跳ね返す。で？どうする？」

「それなら、接近戦を挑むだけよ。」

そう言い朝倉はナイフを持ち高速で迫るが

「接近戦で俺に挑むとは笑い話にもならないな。俺は軍隊と一人で戦えるんだぞ？」

そついい朝倉の腕をつかみ投げ捨てる。

「おい、長門とやらもう時間は稼いだだろ？」

「情報連結解除開始……」

そつ、長門が言い始めるとターデイスを除いてすべての机や椅子そして朝倉の体が消えていく……

「あゝあ残念所詮私はバックアップだったかあ」

「硬直状態を何とかするいいチャンスだと思つたのにな」

「変な乱入がなかったら達成できたのかな？でももう言っても後の祭りね。これをあなたたち人間は後悔つて言うのかな。」

「私の負け 良かったね延命できてでも気を付けてね、統合思念体は〜」

と原作と同じ言葉を朝倉は紡ぐ

「最後にあなたは誰？」

「ドクターだ。ただのドクター。」

正直名前はないしな

「じゃあね、涼宮さんとお幸せに……………」
朝倉は完全に消滅した。

「教室を再構成する。」
言ったそばから教室が再構成される。

「で、どうする？まずは何処かへ行こうか。さあ、入れ」
そうして、二人はターデイスに入り

「君の家に行こうか？座標を」
そして長門が映画の時のように腕へ座標を渡す。

へえ、てか何でわかるんだろう。ご都合主義ってやつだろう。
ボタンを押し教室からターデイスが消えていくとき

「WAWAWA忘れ物〜」
ゲ！谷口だ、忘れてた……………

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが消えていくのを

「うお、ナンナNDER」

谷口が目撃した・・・
まあ、谷口だしいいや

あの三年前に行ったときの部屋にターデイスが現れ『ガガガッガ
ガガ』あ・・・天井が・・・やべえええええええ

初の戦闘（後書き）

ご覧ありがとうございます。

フォースフィールドってスタートレックとかのと同じですよね？
次回詳しい自己紹介を

自己紹介！

さあ、長門の家についたわけだがどうしようかな……あの音は確実に屋根潰したしな、長門に後でどうするか聞こう。

ガチャ

「ここは？」

キヨンが呆けたように聞く

「ここは長門の家だ。」

ここがああ長門の家か……感激だな。

「そう。ここは私の家」

「まず、あなたは何？こんな技術この時代にはない。世界を移動するなんて情報統合思念体にもできない。そしてI.T.T.Fを圧倒する戦闘技術あなたは人間？」

長門がマシンガンのように質問してくる。

「まあまあまず座ってもいいかい？」

「どうぞ」

とあの何もない部屋に座る。

「で、ドクターとやらなぜここにきた？」

「ここに来る気はなかった。違う世界に行こうとしていた。その世界は魔法や妖怪などがいるような世界だ、だがターデイスを作動さ

せた途端トランスマツトビームいやそんなレベルじゃない、謎の何かに包まれた。気づいた時にはこの世界だ。長門よなぜだ？なぜ俺はこの世界に来させられた？」
大体検討はついているんだけどな。

「おそらく涼宮ハルヒがここにあなたを此処に呼んだ。あなたが現れる少し前涼宮ハルヒから膨大な情報フレアが観測された。それがあなたとこの移動装置を此处へと呼び寄せた。それがあなたがここにいる理由。」

「だからターデイスがこの時間軸に固定されているのか、つまり俺はここから動けないと・・・」

「そう」

「どうしようかな？でも、少しターデイスを調整すればいいだろ。無理でもあの白い空間はすべての世界の上位世界だから移動は関係ないしな。」

「じゃあ、詳しい俺の説明をしようか。」

「あなたは何？」

「俺はさっき説明した通り異世界人で超能力者だ。」

「じゃあ、あんたはどんな超能力が使えるんだ？」

「キョンが聞いてくる。そういやここまでキョンは空気だったな・・・」

「具体的に言えば俺のは超能力というよりは少し違う。これはある世界での「異常」《アブノーマル》と呼ばれる力だ。それに俺の「

テレポート」やら「サイキック」なんて言うわかり易いものじゃない。「知られざる英雄」《ミスターアンノウン》と呼ばれ誰も俺を目視することができず覚えても置くこともできない。」

「それは存在を認識できないという異常アブノーマルということなのか？」

「結果はそうだが過程が違う。これは俺の強大さに目を逸らした結果だ。あ、勘違いするなよ俺様とか言ったりするような強大さじゃない単純な強さの副作用みたいなもんだからなだからこそ長門のように人間と違う存在には効かないし俺よりも存在が強大な存在には効果がない。まあ、そんな存在は神様が悪魔とかまず人間じゃないなぜなら俺は一人で軍隊と戦えるからな。」

「な………」

キョンが絶句する。普通一人で軍隊と戦えるなんてアニメや漫画の中にしかないからな

「じゃ、今日のお話はここまでさあキョンは家に帰った！帰った！と無理やり家に追い返す。」

「長門も帰った方がいいと思うよな？」

「思う。」

「てなわけで、さようなら」

ガチャと音が鳴り長門の家から追い出す。

「さて、話すことがある。キョンは気づいていなかったようだがな。や、屋根がぶつ壊れてる。何でもする許してくれ………」
「
と言いつつ土下座する。」

「別にいい。後で直しておく。」
おお、長門が寛大でよかった。

「あと一つ少しここ借りてもいかな？住む場所がないんだ。町にこんな古びたボリスボックスが在ったらへたすりゃ撤去されちまう。」

「いい、この部屋をつかって」

と言い、部屋を貸してくれる。長門感謝だな。よし、ここでやりたかったことがあるんだよな。明日までに準備しないとな……キヨンの驚く姿が目に見えかぶぜ！

キヨンSIDE

今日はいろんなことがありすぎだ。朝倉が殺しにかかってきたり、えーと誰だっけあの男は？だれか忘れたが謎の男が青い箱に乗って現れ朝倉と戦い長門が朝倉を消した。文字道理消したんだ。もう今日は疲れた、寝よう……

『翌日』

今日も始まりあの長門《宇宙人》がいるであろう学校へ向かい……

「ねえキヨン！新しい先生が来るらしいわ、入学してからすぐよおかしいとは思わない？」

そう、我らがSOS団団長涼宮ハルヒだ。昨日ここで自分が望み探している宇宙人の戦いがあったとも知らずに新しく来たという先生に夢中だ。なぜこう近くのことには気付かないんだろうな？

「その先生は物理の先生らしいわ！ねえ、聞いているの？キヨン！キヨン！」

と肩をガンガン脳震盪でも起こしそうなくらいな強さで揺すつてくるので

「聞いているよ。そんなに騒ぐことでもないだろ？都合が変わっただけだろ？それに今日はちょうど一時間目が物理だからな。それで判断してみろよ。」

「あんたに言われなくても、そうするわ！どんな奴か気になるわね！」

別に俺は気にならないよ……

キンコンカンコン

ほら、岡部のホームルームが終わったぞ。何か岡部の話だと先生は男で24歳アメリカで大学を飛び級してるらしいな。何でこんな学校に来たんだ？どこかの大学やら研究室からの誘いぐらいあっただろうに。

すぐにその疑問は解決されることになる。

「あれ？先生遅いわね。もうチャイムなっってから3分ぐらいたってるわよ？」

ハルヒが尋ねると

「もう来てるぞ」

と教卓から音がすると

「うお！」と谷口が声を上げる。そして生徒がそこに目を向けると

「さあ、物理の時間だ！」

お、お前は昨日の！何で！ここに！？

SIDE OUT

自己紹介！（後書き）

主人公を話に絡ませようとするとこうなりました。

でもドクターが使ってたジョン・スミスは使えないしな
名前どうしよう・・・

感想受け付けてます！

俺の職業

「みなさん今日も元気かな？俺の名前は日之影空洞だ。」

と言いながらカクカクと音を立てながらチョークで黒板に名前を書いていく。偽名は迷ったがジョンスミスはやるとやばいのでやめ、そうなるこれぐらいだろう。日本人顔なのにヘラクレスはないしな。英雄の名前は使いたくない。めだかの世界では考え物だな。

「学校で教えるのは初めてだからおかしな点があるかもしれないがここところは頼む。」

「じゃあ、授業を始めよう。まず、俺が物理を専攻した理由だが昔俺は宇宙人やタイムマシンやらにあこがれてたからだが今でも信じてはいる。まあいいこんな昔話しても仕方がないので授業を始めようか。じゃあ、教科書１・・・・・・・・・・・・・・・・」

キンコンカコンコン

てなわけで一時間目は終了だな。

「最後に何処かの部活の顧問をしたいと思ってるから何かおすめがあれば廊下にいるときでも捕まえてくれ。じゃあ、今日の授業はここで終了！」

そして、終わると同時にハルヒが全速力で走ってくる。

「先生！私のクラブの顧問をしてください！」

SOS団に顧問要るのか？鶴屋さんは名誉顧問じゃないのか？

「いいがどんなクラブなんだ？」

「宇宙人や未来人などを探し出して一緒に遊ぶクラブです！」
初めの言葉で大丈夫だと感じたな。

「面白そうじゃないか。放課後どこに行けばいい？」

「文芸部の部室へ。」

「わかった。放課後になり次第そちらへむかわせてもらおう。」
後ろでキヨンがものすごい呆れてるがどうしようかな？ま、キヨンはいいや。

「では、放課後に」

「あ、今度から素で話せよ。」
と耳元で言う。

「！？」

一瞬びつくりしたようにしジト目でこちらを見てくるが無視する。

ハルヒSIDE

やっぱり見込んだ通りだったわ。来ているのに誰も気づかないなんてありえないわ。いくら空気が薄いからと言ってこれはありえない、何かの力に違いはないわ。それに一発で私が猫かぶってるって気づいたしあなたの正体を暴いて見せるわ！

「おい、聞いているのか？」

キヨンが聞いてくるが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！」

「うるさいわね！いまあの先生をどうやってSOS団専属の監督にしようか考えてるの、邪魔したら罰金よ。」

「へいへい」

待つてなさい日之影空洞！

SIDE OUT

キングクリムゾン！

過程が消し飛び結果だけが残る！

そして放課後だ。今あの文芸部室の前にいる何か感動のようなものを覚えるな。そうして「失礼しま〜」・・・・・・・・・・「あ、きゃあああああああああああああ！」バチイン

「すみません。日之影先生」

「いやでも着替えのぞかれたら誰でもこっぴどくすってこちらこそすみません。」

「涼宮さんと呼ばれてきたんですか？じゃあ、お茶入れますね。」

着替えを覗いてしまった。なぜか「知られざる英雄」《ミスターア
ンノウン》も効かなかった。ギャグ補正か乙女の補正かどちらにせ
よ怖いね。でも、有名な文芸部室で朝比奈さんのお茶が飲めるなん
て感激だな。

「はい、おまたせしました。」

フッフ「俺の猫舌なんで。」

「そーなのか」

とたわいもない話を朝比奈さんとしていると

ガチャ

「朝比奈さんだけってあなたもいるのか。日之影先生いやドクター
と呼んだ方がいいか？」

キヨンが言う

「ここでは一応日之影と言っておいてくれ。ハルヒにばれるの面倒
だ。」

「わかった。」

「？」

朝比奈さんだけが訳が分からなさうにしているがそんな仕草も可愛
いですね。さっきもそのたわわと実「バシイ」

「あれ朝比奈さん何を？」

「すみません。失礼なこと考えられたような気がしたので勘違いで

したらすみません。日之影先生」

怖い朝比奈さんこんな朝比奈さんはゴトウー（ry

「長門は？」

「今日は休みらしいぞ。昨日あんなに戦ってたしな。疲れてるんじゃない？」

今日の長門

「これどうしよう」

屋根と戦っていた。

閑話休題

「で？あなたは此処の顧問をやるつもりで？」
あきれた様子で聞いてくるが

「ああ、もちろん」

「はあ、やれやれ」

ガチャ

「遅れてすみません。」
と言いつつ古泉がやってくる。

「こんにちわ。古泉くん」

「はい？ああ、あなたは今日赴任してきた日之影先生ですね。こちらこそよろしく願います。ですがなぜここに？」
「言いつつもこちらが何者が探っているようだな。」

「涼宮に此処の顧問をやってほしいと言われてな。」

ガチャ

「ごつめ〜ん！遅れたわ。日之影先生これでいいわね？」

「ああ、これからもそうしてくれ、それにここじゃあ空洞でいい。」

「じゃあ、空洞、何かこの部活に質問はある？」

「何をするかは聞いたから部員は？」

「私含めて5人よ。今いるのは朝比奈さんに古泉君そしてキョンね」

「いいだろう。顧問をやればいいのか？」

「ええ、お願いするわ！」

「すまないが今日は仕事が残っているんでな。また明日から参加させてもらうよ。」

「明日は休みだから、不思議探検をするわよ。9時に駅の北口集合、遅れたら罰金ね。」

「わかった。じゃあ、また明日。」

そして、土曜日の今日

「キヨン遅いな。」

「遅いわね。あ、来たわね。キヨ〜ン罰金！」

そして、あの喫茶店でくじを引く、俺は……古泉とか……
・くそう何でハルヒや朝比奈さんじゃないんだ！

「では、よろしくお願いしますね。」

キヨンは長門とハルヒは朝比奈さんと3組に分かれて探索へ

「12時にも一度ここに集合ね！何か見つけてくるのよ。」

さあ、古泉は何を話してくるのかな？

「どこへ行きましょうか？」

「そうだな、この町を知らないので適当に頼む。」

「では、少し時間を潰しましょうか。少し離れたところの喫茶店で話しましょう。」

「ああ、わかった。」

喫茶店

「単刀直入にお伺いします。あなたは何者ですか？」

お、これは大胆に聞いてきたな。もっと回りくどく聞くもんだと思っただよ。

「何者と言われても俺は日之影空洞としか言いようがないな。」

「失礼かと思いましたが少し調べさせてもらいました。ですがあなたのことは何一つ出てこない。そして尾行してもいつの間にかいなくなる。僕が聞いているのはあなたが例えば超能力者だとかそういうことです。」

やっぱり調べてたか。昨日から少しおかしいなとは思っていたからな。まあ、尾行の時は異常全開で消えたけどな。

「そうか、じゃあ、観念しよう俺は異世界人だ。あと超能力かと言われれば少し違うが能力も持つてる。」

「では、あなたはなぜ涼宮さんに接触を？」

「いま、俺はこの世界には来るつもりはなかったんだ。世界を旅している途中この世界に引きずり込まれた。だから長門の家に居候している状態でな、移動装置の設定が完了したらさっさとおさらばさ。涼宮に近づいた理由は面白そうだったからな。あ、俺は涼宮をどうにかしようなんて考えてないからな。」

「信じるかはあなたの行動で判断させてもらいますよ。では、探索を続けるとしましょうか。」

といい伝票を持ち古泉は立ち上がる。

「ここは奢りますよ。情報料ですよ。」

といい、後はこの町を案内してもらった。何の変哲もない普通の街なのになぜこんな人外魔境になっているんだろうか？ドクターの力ーディフのように時空の裂け目の跡地なのか？

さあ、12時になったのでもう一度のくじ引きだ。よし、今度こそ！

なんで？おのれ！涼宮ーお前は何なんだーてな感じでハルヒとなりました。朝比奈さんは？どこ逝ったの？長門は？

「なにそんな不機嫌そうな顔してるのよ。私とがそんなにいや？」
別にそういうわけじゃないんだが見た良し頭良し運度神経良しと三拍子揃っている美人と歩いているのになぜだ？

「いや、そういうわけじゃないんだが？」

「なんで疑問形なのよ。」

「いや、なぜこんなにきれいな女の子と歩いているのに何も感じないんだろうと思って」

「デートじゃないからじゃない？それに恋愛感情なんて一種の気の迷いよ。気にするものじゃないわ。それでも仮に科学に身を置く者なの？」

「ああ、その通りだな。」

としやべりながら町を探索したそして集合時間間際にこんなことを

聞いてきた。

「あなたは宇宙人や未来人、超能力者そして異世界人が本当にいると思う？」

「授業の時に言っただ。俺はそれを探すために物理学者になったんだ。自分で自分の夢を否定してどうする。ここにこの日之影空洞が宣言してやろう。宇宙人、未来人、超能力者、異世界人はこの世界にいる！」

「ばっかみたい、空洞が宣言して何になるのよ。」
と言いつつも笑っていた。そうだよ、いるんだそれも君のすぐそばにね

そうして今回の不思議探索は終了を迎えた。さて、この世界にはいつまでいようかな？

俺の職業（後書き）

名前は悩みましたが能力から考えさせてもらいました。
少し長くなってしまいました。
それでは感想をお願いします！

次の旅へと

あの不思議探索から数日経過しキヨンの方はあの探索で朝比奈さんからアプローチを受け、古泉からは昨日アプローチを受けていた。モテモテだな。

そして俺は部室で古泉とゲームしたり朝比奈さんと雑談したり長門に本を貸してもらったりしながら過ごした。

そして今日おかしなことが起こった。それは、少し前に遡る。

4時間前長門家にて

「長門よ、お前たち情報統合思念体は自立進化の可能性を探るために涼宮ハルヒを探索してるんだよな。」

「そう。情報統合思念体は自立進化の可能性を探している。だから涼宮ハルヒを観察している。」

「そこだよ。なぜ涼宮にこだわる？他にも自立進化の可能性はある。」

「！？それはなに？」

「こいつだよ。」といいターデイスを指をさす。

「これはただの次元超越時空移動装置特に特異するべき点はない。」
「わかってないな。」

「これはただのターデイスじゃないんだよ。世界を渡れるんだいわば世界を凝縮したようなもの。これ一つが一つの世界だといっても過言ではない。こいつの調整をするから手伝ってくれ。その時にこれをスキャンしてみるがいいそうすればこいつのすごさがわかるだろう。」

といい長門とターデイスの中に入る。

「××××××××××××」

と長門が呪文？を言う。

「!？」

長門が固まる。

「これは涼宮ハルヒを超える何かがある。本質的には涼宮ハルヒと似て非なるもの。自立進化の可能性になりえるがこれは情報統合思念体では理解不能役に立たない。」

高度すぎ？

「そうだったか。少しでいい調整を手伝ってくれ。」

「・・・・・・・・・・」

無言で有名カレー店のチラシを見せてくる。

「ここに今度つれて行ってか？」

無言で首を縦に振る。

「ゲ！これ一皿3000円もするじゃねえか・・・・・・・・・・」

無言で長門が見つめてくる。

「わかったよ。連れて行ってやるから手伝ってくれ。」

「わかった。」

と長門に言いくるめられカレーを奢ることが確定しながらもターデイスの調整をしているとき……

ガタン

とターデイスが揺れ機器から火花が散る。

「どうしたんだ？」

長門に聞いてみる。

「涼宮ハルヒが新たな世界を創造しようと新しい時空間に自分と彼を閉じ込めた。」

ああ、あれは今日だったのか。

「これでそこには行けないか？」

ターデイスなら……

「今の調整では不可能、できるとしても……………」

キョンスIDE

妙なことになっちまったな。閉鎖空間にハルヒとともに閉じ込められちゃったな。古泉はどこにいる？

あ、あの赤い球体は

「古泉か？」

「はい、そうです。」

「もつとまともな姿で登場すると思っていたが？」

「それも込みでお話することがあります。正直言います。これは異常事態です。「そうだな。」

！？声のする方に目を向けるとドクターが

「なんでお前がここに？」

といい触ろうとするがスウウと手がすり抜ける。

「あ、あれ？」

「そうだ、古泉ですら無理なのにどうやって入れると思っているんだ？これはホログラムだ。俺の船から映し出してる。」

「そういえば朝比奈みくるから伝言を言付かっています。ごめんなさい、私のせいです。」と「長門からはパソコンをつけるだよ。」

「俺からは一つだけ眠れる姫を起こすのは王子様の仕事だぜ。」
古泉とドクターの体が消えていく……

「お、おい、まて」

「パソコンをつけるよ。わかったか？じゃあ、世界はお前にかかっている。勇者みたいでいいだろ？」

といいドクターが消える。

「では、私もこれまでのようですね。そちらの世界で私が生まれるようなことがあればよろしくやってください。それでは」

おい、古泉まで……よし、パソコンをつけよう。

SIDE OUT

とここからは原作通りだ。特に言うべきことはないだろう。

あの空間のエネルギーを吸収したお蔭でこの世界から離れられるようになった。

「キョン、やったな！」といい肩を叩きまくる。

「軍隊と戦えるような腕で肩をたたくな。へたすりゃ吹き飛んじまう。勘弁してくれ。」

「つれないな。さあ、差し詰めお前は世界を救った勇者つてところだ。さ、ここからはどうするハネムーンか？」

「ふざけんな。」

「まあまあ、これで俺はお役御免だな。ここで俺は消える。そして知られざる英雄で忘れられる。いままでは異常を最小までに抑えていたが最大にまで上げる。あ、お前たちの記憶は消えないぞ、長門に頼んで消さないように頼んだからな。残念だったな。三日後俺は発つだから電話番号を覚えておく。」

「何でこんな急に？それに世界が違ふのなら電話は通じないんじゃない？」

「元々違ふ世界に行くつもりだったんだ。その世界に行かせてもらうよ。俺の電話は特別性だぞ。宇宙の端から端でも届く。世界も同じだ。」

「じゃあ、何時に行くんだ？」

「三日後の夜7時だ。」

「長門の家に7時だな？」

「ああ」

そして、三日後

「なんでハルヒ以外全員集合しているんだ？」

「僕は世界を移動する装置を見たかったもので」

古泉が正直に

「私は普通にお見送りに」

朝比奈さんは可愛らしく答える。

「一応SOS団の顧問だからな。見送りぐらいする。」
キョンが答える。

「じゃあ、俺の船を見せよう。」
といいあの部屋の襖をあける。

そこにはターデイスがある。反応は三者三様

「これが？これは1960年代のイギリスでのポリスボックスじゃないですか。」

古泉が

「こ、これはまさかこれがここに？じゃあ、あなたは……」
なぜあなたは驚愕しているんですか？朝比奈さん？私は未来で何かしたんですか？俺……」

「やつぱりこれか。見た目は変わらないのか。」
キョンが言うがこの見た目がいいんじゃないか。なぜわからない。

「古泉よ。なら中を見えるか？」
そっついドアを開ける。

ガチャ

「これは………すごい！」
なんかすごい古泉のキャラが変わっているな。これが素か？

「はう〜」バタア
朝比奈さんが倒れた。

キョンは外で待っている。

「なぜ見た目より中が広いの？」

「企業秘密だ。」

「では、行くとしよう。長門よ、調整は完璧だな？」

「完璧」

「では、出てくれ。」

「待つて、これを」

といい長門が一冊の本を渡す。「ハイペリオンの没落」よりによつてこれか・・・

「読んで」

といい見つめてくるので

「ああ、わかったよ。」

「では、出てくれるか？」

ガチャ

ドアを閉める。

「じゃあ、何かあればまた来る。また逢う日まで。」

「では、また」

「またね。」

「またな」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが消えていく……………

「行つたか？」

「この世界から彼の反応が消滅した。」

「またと言つたんです。また会えるでしょう。」

ターデイス内部

「ハルヒの世界はまた来ないとな最低でも消失の時にはな」

では、あの空間に行くのでしょうか、

白い空間へ

「もう私にこんな子を押しつけてあいつは何を考えているのかしら？」

アテネはつぶやく。

「言ったところで無駄でしょ？待ちましょ、気長にね」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが現れる。

「やっと来たわね。」

ガチャ

「あ、アテネあの送った子はしっかりといえる？」

「ええ、ここにね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん」

次回へ続く！

次の旅へと（後書き）

強引ですが終わらせました。正直この世界は消失やエンドレスエイトがありますのでまた後でも来る理由は山ほどありますね。ドクターにはやっぱりコンパニオンが必要でしょう。ということではルヒ本編では初めと消失そして驚愕にしか出ていませんので朝倉さんにご登場願いました。

では感想よろしくおねがいします。

コンパニオン

なんで俺戦ってるの？

「ハアアアア！拳破拳破、拳々破アッ」

「ふん、効かないわね。今度はこっちの番よ。」
ほんとになんでこうなっただらうね。

一日前

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん」
なんでナイフ向けられてるの？

「てか、何で向けられてるの？」

「そのぐらい自分で考えなさい。晩御飯までには帰ってきなさいよ」

おい、まてアテネなぜとめない。それに晩御飯ってなんだ。

シュン、ビュン

「おい、まて話せばわかる。」

「問答無用」

なぜ知ってる？ ナイフ避けながらネタやるのは神経使うな。

「私あそこで消えたんでしょ？何でこんなところに送ったのよ」

「いや、一緒に旅をしてもらおうかなつと」

「何であんたと一緒に旅をしないといけないのよ」

「戻ったところでもう統合思念体とのリンクは切れてる。今の君は妙な力が使える人間じゃない美少女女子高生つてな感じた。魔法少女もビックリだな。」それはもうね。情報連結解除なんてどんなチートだよ。

「じゃあ、どうしろつてのよ……」

「だから俺と来い。その中で答えが見つかるかもしれないだろ。それに元の世界にずっとは無理だが少し見に行くぐらいなら定期的にさせてやる。」

「いい、行かせてもらうわ。でも一つだけ条件があるわ。」

「そんな簡単に決めてしまっているのか？」

「だからこそその条件よ」

「何だ？」

「何なんだろう。俺に死んでくれとかはきついな。まあ、死んでも死なないけど」

「私と戦いなさい、あなたが勝つたらついてく、あなたが負けたらその時は……あなたの命をもらうわ。」

おおう、過激だな。

「いいだろう。アテネ合図頼む」

「OK、ガンダムファイトーレディーGO」

「ガンダムじゃねえええええええええええええええええ」

声を反響させながら戦いは始まった……

てなわけで初めの場面からさらに24時間後

「もうだめ……」

「私毛・・・」

「はい晩御飯の時間ですよ。涼子ちゃんの手伝ってね。」

いいアテネはどこからかちゃぶ台を持ってくる。どっから持ってきたんだそれ……

「だから涼子ちゃんって呼ばないでっ」

と言いながらも晩御飯の準備を始める朝倉、なんだ？母と子か？

「母さん今日のご飯は？」

聞いてみた。

「誰が母さんか！」

アテネに殴られた。

そんなこんなでご飯を食べた。朝倉のおでん映画で美味しそうだったけどほんとに絶品だな。

「じゃあ、行くわ」

そろそろ行こう

「勝ち負け決まってるないけどいいわ、じゃあねアテネ」

「また、3人でご飯食べましょ」

「ああ」「ええ」

「「またね」」

「ええ、また」

ポリスボックスに入る

「何此処！」

といい外に飛出しポリスボックスの周りをぐるぐるとまわる。

「中の大きさと見た目が比例しないわ！なにこれ！こんなのに負けたとなれば納得できるもんだわ。」

「あ、ああ、勝手に納得しておいてくれ」

次の世界はどうしようかな。あ！朝倉に聞いてみよう。

「おい、朝倉「朝倉ってのをやめてくれない？他人行儀でいやだわ。これから長く共に旅をするんでしょ。」

「わかったよ。涼子ちゃん」

「涼子ちゃん言うな！涼子よ！わかったわね。涼子よ」
ナイフ向けながら言うのやめてもらえませんか？

「わ、わかったよ。涼子ね、涼子OK、OK」

「分ればいいのよ。分ればね／＼／」

顔を赤くするほど嫌だったのか……残念だな。涼子ち「何か？」だからナイフ向けないで……

「涼子、どこの世界に行きたい？」

「どんな世界があるのよ？」

「どんな世界でもある。剣と魔法の世界、未来都市、科学と魔術の世界、夢の世界、冥界や天国、魔王までいる世界だってある。より取り見取りだ。」

「じゃあ、妖怪が見てみたいわ。本で読んで見てみたかったのよ」あ、涼子が目を輝かせながら言うてくる。

「じゃあ、出発だ！」

そう言いターデイスを作動させる。

「2000年代に行こう。」

ギョォーン！ギョォーン！独特のエンジン音を鳴らし動き……ああ、着いたか。

まず、外の様子を見よう。このパソコンで見れるだろう。ガチャ、ガチャ　なんか外で軍隊みたいなのがターデイス囲んでるんだが、これってヤバいところに出たか……あれ？一人だけ軍隊じゃないな。あの特徴的な服は……

「さあ、外に出てみよう。」

「大丈夫なの？武器持って構えてるわよ。」

「こっちは武器なしだ。やられてもこっちに正義がある。」

「不法侵入だけどね。」

「これは痛いところを……。」

「では、参りましょうか？お姫様」

「行きましょう。」

俺が涼子の手を取りターデイスのドアを開ける。

ガチャ

「おい、貴様何者だ？」

軍服の一人が聞いてくる。

「俺h「待ちなさい、こちらから名乗るべきです。私は八意永琳です。あなたは？」

やっぱりえりんか……

T
O
B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
↓

コンパニオン（後書き）

やっぱり東方の世界に行ったとなれば歴史のーから見ていくべきで
しょうしね。では感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8398x/>

知られざる世界の旅人

2011年10月30日06時15分発行